

り乗ると恐ろしくなり、ホテルに籠城する。

八時に宿を出てア翁の案内でボンベイ見物に出かける。オリヅの木、アカシアの木、オリアンダの木、ソルベの木など暇に委せて木調べをやる。ボンベイの發掘物は寧ろナポリの博物館に珍藏されてゐる。例の喧し物は博物館の秘藏である。處女に人世の要諦を教へる壁畫はボンベイにある。特別觀覽の秘物を特に覗ふ者は米婦人である。一人の婦人は熱心に見た後にO myの感歎辭を發する。一人は無言なること暫時の後、オ！尤も！と云ふ。他の若き婦人はナイス！と云ふ。ア翁の説明を聞いてゐた一人は千年の昔にもこんなことがあつたかと問ふ。ア翁早速と、若しなければ人類絶滅だと云ひ平然とすましてゐる。ア翁笑つて曰く、あんな秘物を見るのは男子よりも女子の方が好奇心に富むのだから面白いと云ふ。往年京外醍醐寺の秘藏である鳥羽僧正の秘畫を最も熱心に觀たのは女流畫家であつた。彼此想ひ合はして甚面白く思つた。ボンベイを研究せんとする者には非常な豫

備知識が要る。或者は紀元前の都市計畫を見んとするであらうし或者は水道の設備を研究せんとするであらう。或は浴場設備を見んとするであらうし、或者は劇場その他富家の家屋建築を研究するであらう。或者は壁畫その他庭園の設備を見るであらう。或はその昔の娼家に好寄心をそゝるであらう。老古歴史の眼をもつて種々の設備を見る時一日にして日足らざるを覺えるのである。

新著紹介

○郷土地理研究

小田内通敏著 刀江書院發行
定價二圓二十錢

本書は四六版三百二十五頁の手順な本である、題して郷土地理とあるが、内容は郷土としての村落と都市、郷土地理への學的根據、郷土地理研究項目の三綱目をかゝげ所謂郷土地理は一一八頁これに都市地理の研究といふ數十頁が添加されてゐる、故に中程からさきは、これは都市地理學の本かとも考へさせる。勿論都市も郷土の一つであるから差岡へはしない、けれども著者の見解によるとさきの郷土地理といふのは郷土の單位は一軒家であつて、それから村となり山の村、野

る。(F)

○人文地理學講義 下卷

西龜正夫著 古今書院發行

定價三圓六十錢

の村、濱の村、町の發達といふ所でうちきつてある何となればそれ丈けが前編であるからである、換言すれば我々のいふ聚落といふ語と郷土といふ語とが一致してゐるので、本書も亦村落立地の考察といふ項目があつて、さうしたことを細説してゐるのである、さうして突如として都市地理の研究といふ別の項目が出てくる、思ふに著者は郷土と都市といふものを二つの研究の對象としてゐるのであつて、この兩者の綜合的研究を試みたといふのではないのである、何となれば前編と後編と峻別して、その連鎖を缺くことが、さうした疑を起さずるに十分であるからである、従つて本書の研究的態度からいへば個々の農村は農村としての諸相をのべ、個々の都市は都市としての分析と綜合とを説くといふ風であるから面白い觀察が隨所に現はれるけれども、讀後に之を一つに綜合することが出来ない。いろ／＼外國の學者の説が引用されてゐることゝ、之を巧に引用説明する所は手に入つたものであるけれども、結局はこれは聚集されたにすぎなくて構成されたとは考へられないと思ふ。しかし本書はさうした引用によつて外國の學者がどう考へてゐるかといふことを明にしらす所の長所をもつてゐる、一つの體系に完成されてゐない憾があるけれどもそれが現今の郷土地理學の常態であるといへば敢て著者を責むるには及ばぬかもしれない。猶この本によつて人文地理學の研究の題目もしくは手續きといふものが知られることと及各國の觀察項目がのせてある所に著者の親切があると思ひ敢て聚落地理を研究せんとする人々の坐右に推薦す

古今書院はやたらに地理書を出すので、幾分評判がよくないやうであるが、本書はさうした著述の中で出色のものである、著者は山陽廣島で學究の君子である、さきにも上巻を出して已に一年有半、忽ちにして菊版五二〇頁の本書を完成した精力に敬意を表せざるを得ない、本書は聚落地理學、生産地理學、商業地理學、政治地理學、文化地理學の五篇を收めて著者がいかに學問を分類し聚蒐するに鋭敏であるかを實證した、しかしかうした五篇そのいづれを見ても一つ一つで五百頁以上の大著述になりうる可能性の多いものである。たとへ著者の手許にその種本があつたとしても、この五つをこの一冊に纏め上げて、それ／＼の日本に關係する部分に迄、少からぬ説明と注意を拂つたことは、(それは種本にはない)何といつても著者の努力によるものとせなくてはならぬ。筆者はこの五篇のうちで特に聚落の一章を面白く讀んだ、勿論その細部に於て筆者の説述を引用された光榮に浴したことを喜んでゐるのではない、又實に予の言つたことゝはやゝ違つて引用されたことに不平があるといふのではないが、とにかく本書は聚落を論じて體系を整調にし、叙述を慎んでとにかく一通りは書くといふ風であつて、聚落の位置、形態、組織、構造、生態、機能、分布に及び、原始聚落から村となり、町となり

大都市に發展する跡が明瞭に綜合的に編述されてゐる、近頃この方面の著述として世に出たものの中で、本書の聚落論のごときは慥かに出色のものであらう。筆者も聚落の發達に關して説述したい多くの希望がある、さうして自分の智識からみて、本書の論ずる所が、すべて正しいとは思はないけれども初學の人にかうした良著をすゝめうる機會を得たことを賀せざるを得ない、予は本書をみてつくづくと仔々學にいそしむ人の樂のいかに深いかを學んだ、敢て提燈を持つて江湖に紹介したい。(藤田)

○國民世界地理

上卷

藤田元春著

四六版四七〇頁+

四〇頁 圖版二十五葉

富山房發行

九月

定價二圓二〇錢。

讀み易く解し易くして而かも現今地理學の科學的觀念を表現する地理讀本として小川、石橋兩博士の序文を冠頭に掲げて公にされた世界地誌である。要領のいゝブルツクスの『世界』に依つて之に日本人として知らねばならぬアジアの各國殊に支那等に關して必要な事項を補なつてゐるのは日本で出る地誌としてさうなくてはならぬ所である。ブルツクスにはない寫眞版を豊富に入れたことは編者の勞を多としなければならぬ。著者も自序中に云つてゐる様に政治地理に關した點はブルツクスから離れて新に著者の意見に従つてゐる。併し獨り政治地理許りでなく隨分著者の洞察を發揮してゐるから

其の積りで著述として見るべきもので譯書ではない。従つて次の如き例は時に目を惹いて原著併讀の必要を感じさせる。一例に曰く、原著を紹介子が拙譯すると『それ故にかゝる地方(平原からの壓迫の爲めに或る民族が山地に隠れた様な)に就いては、稀有にして雅味のある陶器を使つて居る人間の幾分かの精神を考慮に入れなければならぬ。吾人が眞に關心を持ち重きを置く事物を有するのは獨り繁華な近世的工業地域にのみあるのではない』と讀める所を、我が『國民地理』では『恰も焼物に入れて貯へる所の焼耐か何ぞのやうにこれを汚してはならぬ。さうした古い習慣や民俗に到底いそがしい近代の工業地域に於ては構つて居れない事なのであるからである』さうである。焼物云々を理解出来る我が國民は恐らくあるまい。これは例であつて四百數十頁が皆かうであるといふ様なことは無論ないのであるから、誤譯の箇處を骨を折つて直されたら國民地理になるべきは請け合ひである。(N)

○自然地理學

デーヴィス著 小川英男譯 菊版四一三頁

古今書院發行

十月

定價三圓八〇錢

デーヴィスの一九〇二年に公にした初等地理學を忠實に邦譯したものである。序によると一九二六年版だとあるけれども原著は一九〇二年以來新しい版を出したものである。原著者の序文の一九〇二年三月の日附を譯さなかつた所にわざとらしい嫌さがある。本文は省略せずに皆譯されたのと誤り

などがないのはうれしい。原著は既に多數の日本の地理學入門者を益したことの甚だ多いものであるが之が邦譯を得て一層地理學初歩を容易に理解せしむることになったのは喜ばしいことである。但し忠實すぎる位に正しく譯したものであるから約三十年前から以後の新しい何等の知識にも接することはない。卷末にある文献の雜誌中には今は改題したものもあるから入門者をして誤まらしむる點もないと云へない。デーヴィスよりも新しいマルトンヌの地文學要略（一九二二年版）を譯される方があつたらよいと思ふ。（N）

雜 報

○稀土類の利用

地球を構成する元素は今日まで既に九〇種ばかり發見された。然し未知元素の發見史の跡には既に有史以前から人類に利用されて居た金や銀や鐵などのやうに頭の働きのよらず單に體力の活動によつて偶然發見されたものもあらうが、是等を除いた他の元素の發見には幾多の先覺者が洵に言語に盡せぬ暗惱たる苦しみを味つた貴い研究があるのである。就中稀土類と稱する一元素團は相互にその物理學的並に化學的性質が酷似して居て、その分離が頗る困難であつたため現に知られて居るやうに十六箇の元素を發見するには十八世紀の末葉から二十世紀に亘る約一世紀以上の歲月を要した。化學史上に燦然たる光輝を放つ所謂化學成熟期に

於てすら稀土類の分離にかく多くの日子を費したことは實にその研究の困難なるためであつて、それ丈の學問上の價值があるわけである。從來新しい珍鐵物を發見した場合には唯化學分析によつて新元素を發見して行く手段が用ひられてゐたが、これも遂にはその極點に達し最早行つまりになつた。そこで化學分析に加ふるに電解分析とスペクトル分析の二つの新武器が利用され目覺しい進歩を遂げた。メンデレーフやボーアの周期律が未知元素の存在を豫言したことは是等の研究に一燈火を與へた。そもそも十八世紀末に瑞典のガドリンがストツクホルムに近いイツテルビーで發見した新鐵石が稀土類元素の研究の創りであるがその當時は唯學者の道樂位にしかな考へられず人間生活には沒交渉なものとして全く顧られなかつた。然るに一八八四年にウエルスバツハがトリウムと少量のセリウムとの混合酸化物が熱せられる時に非常な光輝を放つことを發見し、所謂瓦斯白熱燈の特許を得てからは稀土類の研究が俄然世人の注目を惹くに到り、その原料たる鐵石の探索が始まり遂に南米に於てモナザイト砂の一大鐵床を發見するに及んだ。爾來稀土類に關する研究は日に月に長足の進歩を遂げ最早今日では化學の一分科とし確然たる位置を樹立しその工業的應用は益々擴大されて底止するところを知らざるの状態である。茲に稀土類の興味ある發見史や化學性質に就いては述べないが唯その應用の梗概を紹介して見よう。稀土類の元素名及發見者名を年代順に表示すれば次の如くである。